

VI 総 括

縄文土器の編年 (第99～101図)

野向他2遺跡から出土した縄文土器は、断続的ながらも早期中葉から晚期中葉までに至る幅広い時期のものである。中でも集落の存続に係わる時期は、堅穴住居跡等の検出事例より中期末葉から後期前葉にかけてであり、土器の出土量もこの期間のものが主体を占めている。しかし、出土した土器は小破片のものが大半で、全体の器形や文様構成の把握できる資料は少ないというのが実状であった。

本章ではこれらを所属時期によって大別して、縄文土器についての編年的位置付けを行う。型的に連続性のあるものは一括し、また1点のみの確認であっても前後の型式と連続しないものは一群として扱ったため、以下に示す9群に分類される。なお、土器群の分類は遺構単位で出土したものはともかく、包含層出土土器については遺物の時間的な前後関係を層位的に捉えることが不可能であった。したがって、その基準となったのは従来の編年研究の成果をもとに、文様や施文手法の観点から分類を行ったことを断っておく。

第Ⅰ群土器

貝殻文や沈線文を主体とする早期前～中葉に属するものである。器種は尖底深鉢で、平縁もしくは波状縁となる器形と認識される。

- 1 類：斜格子状沈線を施文するもの。器面は内外面の削り・磨き調整が丹念に行われ、焼成も良好である。胎土に繊維は含まれない。
- 2 類：沈線文・貝殻腹縁圧痕文・連続刺突文等により文様構成されるもの。文様要素は太・短沈線文に加え、貝殻腹縁文や爪形刺突文等が多様される。
- 3 類：沈線文・貝殻腹縁圧痕文・連続刺突や押引文等により文様構成されるもので、2 類に比較して器厚は薄手となる。


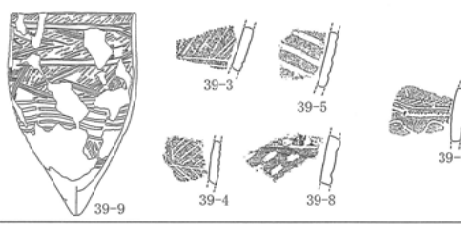


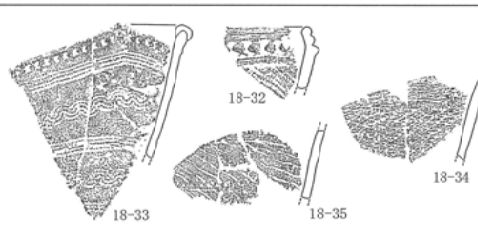

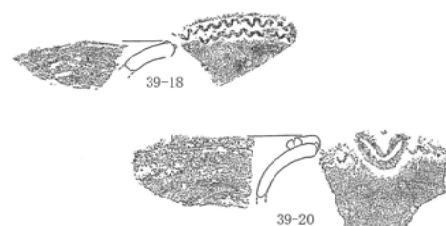
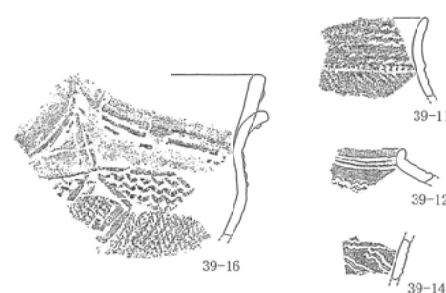
1 類は沈線文系土器として扱われ、竹之内式または関東の三戸式に比定される。2・3 類は貝殻沈線文系土器であり、2 類は関東の田戸下層式に併行するものである。この中で曲線的なモチーフとく字状の押引文が主体を成す類は、明神裏Ⅲ式に比定されよう。3 類は田戸上層式に併行すると見られるもので、連続刺突文が口縁部に集約される特色を有する類は常世式に属すると考定できる。

第Ⅱ群土器

撚糸圧痕文が主体的に施され、前期初頭に位置付けられるものである。器種は屈曲の少ない深鉢が一般的と認識される。口縁部文様帯には撚糸圧痕文を蕨手状に施しており、胎土に繊維を多量に含んでいる。東北南部の上川名Ⅱ式土器と判断される。

第Ⅲ群土器

半截竹管や櫛歯状工具による沈線文と各種の撚糸文が特徴的な一群で、前期中葉に位置付けられるものである。口縁に4単位の山形突起を持つ深鉢は、突起部に貼付文を配するものもある。胎土には繊維を含むものが多く、大木2a式の範疇に比定される。

時期	関東	南東部北	新潟	市野々向原	野向
縄文早期	I 1	三戸	竹ノ内		
	I 2	田戸下層	明神裏Ⅲ		
	I 3	田戸上層	常世		
縄文前期	II	花積下層	上川名Ⅱ		
	III	黒浜	大木2a		
	IV 1	諸磯a	大木3		
	IV 2	諸磯b	大木4		
	V	十三菩提	大木6		

第99図 出土土器編年(1)

第Ⅳ群土器

半截竹管による沈線や押引文、または粘土紐の貼付けによって文様が施される前期後葉に属する一群である。後者の資料からは、口縁が大きく外反して開く深鉢形態が窺い知れる。

1 類：半截竹管や棒状工具による沈線文・押引文を施文するもの、及び刻目のある粘土紐が貼付けられるもの。胎土中への繊維の混入は微量である。

2 類：口唇や口縁に刻目のない粘土紐貼付文が施されるもの。文様単位として細い粘土紐を小波状に巡らし、太紐にてV字状や波状の装飾文を作り出すことが特徴である。これらのモチーフは、口唇や口縁内側に貼付けられる。

1 類は沈線で区画された口縁部文様帯に山形沈線が施文されたり、上面に刻目が施された粘土紐を巡らすなどの特徴から大木3式に考定される。2 類は粘土紐貼付文が盛行する型式と捉えられ、口縁部の立体的な装飾文によって文様構成される大木4式土器に位置付けられる。

第Ⅴ群土器

半截竹管や棒状工具による沈線文・押引文、及び粘土紐の貼付けによって文様構成される前期末葉に属する一群である。器形は頸部でくの字状に大きく縊れる形態が多く、口縁部が肥厚するものも認められ、文様帯は口縁部・頸部・胴部に分割することが特徴となる。頸部文様帯には数条の沈線文や爪形の押引文あるいは鋸歯状の貼付文が施され、口縁・胴部文様帯の区画線となっている。これらは大木6式土器の範疇に捉えられ、関東の十三菩提式や新潟県の重稻場式に併行する要素を持つと考えられる。

第Ⅵ群土器

半截竹管による平行沈線を描出した中期前葉に属するものである。深鉢の器形は頸部に縊れを持ち、胴部上半が張り出す形態と窺われる。頸部に施された横位隆線には爪形刻目文が付けられ、胴部には平行沈線が縦走している。北陸の新保式に後続する新崎式に比定される。






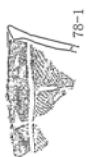
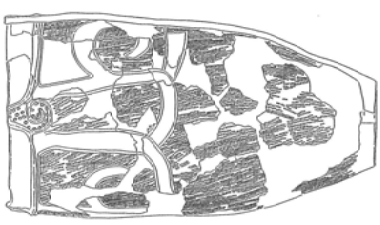










第Ⅶ群土器

隆線や沈線を用いて縁どった文様の内外部に地文を充填する土器群で、中期末葉に属するものである。器種に深鉢・鉢・浅鉢・壺・注口土器等が認められ、深鉢の器形は口縁部が外反もしくは外傾するものが多い。

1 類：器面全体もしくは胴上・中部にS・C字状文が幅広の沈線で描かれ、文様内部に地文が充填されるもの。地文は単節縄文が主体となり、沈線は線を引いた後に磨き調整が加えられることもある。

2 類：器面上半部にS・C・U状や波状文が隆・沈線によって描かれ、文様の内外部に地文が充填されるもの。文様の内部は無文で、外側に地文が充填されるものも多く認められる。地文は単節縄文が主体だが、撚糸文も見られる。

1 類は横方向に文様が展開するものであるが、文様は単独で描かれることが多い様相から大木10式古段階に位置付けられる。2 類は文様がしだいに器面上半部に集約される傾向が認められ、文様は連結したS字・U字状文が基本となり、区画内に刺突文が加えられるものが存在する等から、新相を示す大木10式土器と捉えられる。

時期	関東	南東北	(新 北陸)	市野々向原	野向	千野
縄文中期	VI	阿玉台	新崎	 41-31	 16-11  16-9	 83-98  78-2  78-1
	VII1	加曾利 E IV (古)	大木 10 (古)			
	VII2	加曾利 E IV (新)	大木 10 (新)	 40-21  41-22  41-27	 15-1  15-2  17-24  15-4  17-25  15-7  17-27	 83-97

第100図 出土土器編年(2)

時期	關東	南東北	新潟	市野々向原	野向	千野
VIII1	称名寺 I	網取 I	三十稻場 (古)			   
						
VIII2	称名寺 II	網取 I	三十稻場 (古)	  		     
VIII3	堀之内 1 (古)	網取 II	三十稻場 (新)	 		    
VIII4	堀之内 1 (中)	網取 II	南三十稻場 (古)			   
VIII5	堀之内 1 (新)	網取 II	南三十稻場 (新)			 
						 
VIII6	堀之内 2	網取 II	南三十稻場 (新)	 		  
IX1	安行 3a	大洞 B	石倉			
IX2	安行 3b	大洞 BC	石倉	  		
IX3	安行 3c	大洞 C1	朝日	 		
弥生 (X)	前期	後半	弥生 (X)	   		

第101図 出土土器編年(3)

第Ⅷ群土器

隆・沈線によって文様帯が区画され、特徴的な刺突文や貼付文及び条線文や集合（多条）沈線文が施されるものを一括した。これらは刺突文系土器と沈線文系土器に大別され、後期初頭から前葉に属するものである。器種に各種鉢・壺・蓋・注口土器が認められ、深鉢の器形は口縁部から頸部にかけてくの字状に外反し、球形長胴を呈するものが精製土器に多く見られる。その他には胴部から口縁部まで屈曲せず直線的なものや、口縁部が内傾するもの等が知られる。

- 1 類：深鉢は頸部に刺突などのある隆線文を巡らし、口縁部より垂下して連結する区画隆帯文を持つことを特徴とする。口縁部は無文となるが、区画沈線内に充填縄文が施されるものが一部残存する。他には胴部に J 字状の沈線文が施文されるもの、小型の橋状把手を有するものなどが存在する。地文は縄文と花卉形や爪形の刺突文が見られる。
- 2 類：深鉢頸部の隆帯は一周せず連鎖しない x 字状になること、あるいは口縁に 4 単位の逆凹状山形突起を形成して巡る隆帯が貼付けられることを特徴とする。後者はやや先行する形態と認識され、編年表では 1 類に含めている。橋状把手は 1 類に比較して大型になり、形状也多岐にわたる。地文は刺突文が主体的で、他に条線文や撚糸文がある。蓋は側辺に把手を持ち、刺突のある隆帯を施文するものが認められる。
- 3 類：頸部に隆帯を巡らす深鉢は縊れが弱まり、橋状把手は扁平になって小型化となるか、退化して口縁に癒着し突起や貼付文に変容する。口縁部や胴部には、沈線による区画文等が施されるようになる。蓋は隆帯や沈線を端部に並行または渦巻状に施文しており、加飾が著しくなると同時に端部の挟りが大きくなる。地文は縄文の他、特徴的な花卉状の刺突が姿を消し、刻目や方形状の連続刺突文が整然と列状に施される。
- 4 類：頸部が縊れる深鉢は口縁端部が複合口縁状に屈曲して立ち上がり、平縁に突起を持つことを特徴とする。肥厚した口縁部に文様を集約させたものが多く、端部に円形押捺文を巡らすものもある。複合口縁状の端部には縁帯文等が施され、地文となる縄文の上から弧状や縦位の集合沈線が施文される。
- 5 類：深鉢は 4 類と同様の特徴を有し、口縁に縁帯文を施して端部に沈線による刻目を施文するものが増える。口縁には透かし文様の大型突起を付加するものも認められる。胴部の文様は集合沈線文が盛行し、縄文地に沈線を斜行・蛇行・弧状に施して幾何学的な文様を描出している。
- 6 類：沈線により幾何学的な文様を施文して、充填縄文ないし磨消縄文が多用され、文様構成は横位に展開する傾向が指摘されるもの。口縁裏に沈線が引かれたり、口縁が内側に折れ曲がるものが認められる。

1 類は称名寺Ⅰ式及び綱取Ⅰ式に併行する三十稲場式の前段階に位置付けられるが、新潟県城之腰遺跡（藤巻他1991）の土器編年に倣って、祖型と考えられるものを分割して扱った。3 類までを三十稲場式に比定される刺突文系土器とし、4 類以降が沈線文系土器に相当するものである。4 類・5 類は南三十稲場式を主体とする堀之内Ⅰ式及び綱取Ⅱ式に併行するもの、6 類は堀之内Ⅱ式に位置付けられると考える。

第IX群土器

三叉状入組文や羊歯状文等により文様構成される晩期前葉から中葉に属する一群である。器種に深鉢・浅鉢・壺・注口土器などがあり、地文の縄文は綾絡文が多い。

- 1 類：曲線的な三叉状入組文が沈刻されるもの。口縁部装飾帯にB字形突起を付加し、口唇に大きな刻目を施しており、器面は丹念に研磨される。大洞B式に比定される。
- 2 類：羊歯状文が施されるもの。注口土器の口縁にはB字形突起と浮彫装飾小突起が付けられる。浅鉢は頸部のみに文様が描かれる半精製である。大洞B C式に比定される。
- 3 類：平行沈線間に刻目や刺突が付けられるもの。羊歯状文が押し潰されて平行沈線化するものである。頸部文様帯に珠文状の浮文を施すものがある。大洞C1式に比定される。

以上のような9群の分類を試みたが、層位的に捉えられなかった出土状況から文様や施文手法に頼った位置付けであり、時間軸に組み入れることに無理があるのは否定できない。また、編年表については各地方間での型式対比に問題点を含み、必ずしも整合しない点があることを付記しておく。ただし、当該地域の縄文時代遺跡においては以前より指摘されているように、前期末葉から中期中葉にかけて新潟や北陸地方の影響を受け(新崎式土器など共伴)、中期後半にはそれらの影響が一旦薄れ、後期に入ると三十稻場式土器が流入するなど再び北陸の影響が強まる傾向が、今回の調査でも立証されたことは確かである。

《引用・参考文献》

- 小国町文化財研究会 1988：『小国町の文化財―埋蔵文化財編一』
 山形県 1990：『土地分類基本調査 小国・手ノ子』
 大川 清・鈴木公雄・工楽喜通 編 1996：『日本土器辞典』雄山閣
 新潟県考古学会 1999：『新潟県の考古学』高志書院
- 関野 克 1934：「日本古代住居址の研究」『建築学雑誌』591
 後藤 守一 1940：「上古時代の住居」(上)・(中)・(下)人類学先史学座15～17
 興野 義一 1967：「大木式土器理解のために(I)」『考古学ジャーナル』13 PP16～18
 興野 義一 1968：「大木式土器理解のために(II)」『考古学ジャーナル』16 PP22～25
 興野 義一 1968：「大木式土器理解のために(III)」『考古学ジャーナル』18 PP8～10
 佐藤 攻 1970：「縄文中期集落についての問題点」『信濃』第22巻第4号
 今村 啓爾 1973：「霧ヶ丘遺跡の土壌群に関する考察」『霧ヶ丘』霧ヶ丘遺跡調査団 PP131～159
 丹羽 茂 1981：「大木式土器」『縄文文化の研究 第4巻 縄文土器II』PP43～60
 鈴鹿八重子 1982：「ピット」『東北新幹線関連遺跡発掘調査報告書V. 鳴神・柿内戸遺跡』
 福島県文化財調査報告書第101集 PP332～340
 斎野 裕彦 1983：「考察・まとめ 沼原・嶺山地区の層位関係と土壌・土壌群について」
 『茂庭』仙台市文化財調査報告書第45集 PP518～539
 都築恵美子 1990：「竪穴住居址の系統について―縄文中期後半から後期初頭の住居変遷と時期的動態―」
 『東京考古』第8号 PP1～15
 庄内 昭男 1994：「貝殻文」『縄文文化の研究 第5巻 縄文土器III』PP203～218
- 柏倉 亮吉 他 1970：『山形県西置賜郡小国町朝篠遺跡発掘調査報告書』建設省東北地方建設局
 渡部徳太郎・塚原勇太郎 1980：『蟹沢遺跡発掘調査報告書』小国町埋蔵文化財調査報告書第3集
 渡部徳太郎・塚原勇太郎 1981：『団子山遺跡発掘調査報告書』小国町埋蔵文化財調査報告書第4集
 阿部明彦・名和達朗 1981：『下野遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第38集

佐藤正俊・名和達朗	1982 : 『墓窪遺跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財調査報告書第58集
佐藤 正俊 他	1983 : 「谷地遺跡」『農林事業関係遺跡(1)発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財調査報告書第63集
福島県立博物館	1988 : 『三貫地貝塚』 福島県立博物館調査報告書第17集
黒坂雅人・渋谷孝雄	1989 : 『月ノ木B遺跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財調査報告書第135集
阿部明彦・月山隆弘	1990 : 『川口遺跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財調査報告書第151集
藤巻 正信 他	1991 : 『関越自動車道関係発掘調査報告書 城之腰遺跡』 新潟県埋蔵文化財調査報告書第29集
佐藤 庄一 他	1995 : 『古屋敷遺跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第21集
佐藤庄一・黒坂雅人	1996 : 『富沢 I 遺跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第30集
菅沼 亘 他	1997 : 『野首遺跡発掘調査概要報告書』 十日町市埋蔵文化財発掘調査報告書第9集
小関真司・渡辺 薫	1997 : 『津谷遺跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第46集
佐藤喜春・國井 修	1997 : 『宮下遺跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第47集

報告書抄録

ふ り が な		のむかいいせき・いちののむかいはらいせき・せんのいせきはつくつちようさほうこくしよ						
書 名		野向遺跡・市野々向原遺跡・千野遺跡発掘調査報告書						
副 書 名								
巻 次								
シ リ ー ズ 名		山形県埋蔵文化財センター調査報告書						
シ リ ー ズ 番 号		第71集						
編 集 者 名		須賀井新人 黒沼幹男 國井修						
編 集 機 関		財団法人山形県埋蔵文化財センター						
所 在 地		〒999-3161 山形県上市市弁天二丁目15番 1 号 TEL023-672-5301						
発 行 月 日		2000年 3 月31日						
ふ り が な	ふ り が な	コード		北 緯	東 経	調 査 期 間	調 査 面 積 (㎡)	調 査 原 因
所収遺跡名	所 在 地	市 町 村	遺跡番号					
のむかいいせき 野向遺跡	やまがたけん 山形県 おくにまち 小国町 おおあざいちのの 大字市野々 あざのむかい 字野向	6401	平成元年 度登録	38度 36分 00秒	139度 49分 14秒	19970519 ～ 19970801	7,900	横川ダム 建設工事
いちののむかいはら 市野々向原 いせき 遺跡	やまがたけん 山形県 おくにまち 小国町 おおあざいちのの 大字市野々 あざむかいはら 字向原		1425	38度 49分 00秒	139度 49分 18秒	19970728 ～ 19971015	8,100	
せんのいせき 千野遺跡	やまがたけん 山形県 おくにまち 小国町 おおあざつなきほこ 大字綱木箱 のくちあざせんの ノ口字千野		1423	38度 02分 16秒	139度 49分 46秒	19971023 ～ 19971126	1,600	